



輝石戦隊
キボンヌジャー

戦隊ピンクは性処理係
媚薬快樂堕ち編



今、この地球は——。宇宙からやってきたヨドミガルドと名乗る地球外生命体の侵略を受けていた。そこに勸善と立ちはだかるのは、我らが輝石戦隊キボンヌジャーだった！

輝石戦隊キボンヌジャーは、ヨドミガルドがやってくる以前、突如飛来した隕石から採取された超スーパーパワーにより、変身戦闘スーツを開発した組織で、世界各地にいくつもの支部があった。

今回の物語は、その中の——。日本支部H市基地に所属する戦隊メンバーの話である。

このH市基地所属する戦隊メンバーのピンク枠が欠員した事を受け、新しく入隊した“広井桃華”は、この日——。彼女が加わった戦隊メンバー五人は、ヨドミガルドの拠点アジトの一つを攻略するべく、そこを牛耳っているボス怪人及び数百人もの戦闘員と、今まさに戦っていた。

「やあ！」

キボンヌピンクこと、広井桃華は戦いのさなか、興奮していた。

今までの訓練とは違い、生死を分けた戦いに——。敵の攻撃を交わし、敵を倒す！頭で考えずとも身体が勝手に動き、その高揚感に、初陣の桃華は興奮を隠しきれなかった。

「さあ！どこからでも掛かってきなさい！このキボンヌピンクが相手になってあげるわ！」

それは、桃華の一瞬の油断だった。

桃華が気づいた時——。戦闘員が振り上げていた剣が、キボンヌピンクのマスクを真っ二つに割ろうとしていた。

「きゃ！」

バシュウウウウ！

事もあろうか、桃華は敵の攻撃を目の前に、死を覚悟して、マスクの中で目を閉じてしまった。

だが、桃華のキボンヌピンクのマスクは、真っ二つにされる事はなく——。桃華は、マスクの中で瞳を開いた。

「大丈夫か！キボンヌピンク！」

キボンヌピンクに襲い掛かってきた戦闘員を一撃で倒し——。目の前にいたのは、戦隊メンバーの内の一人、リーダーのキボンヌレッドだった。

「あ、ありがとうございます！キボンヌレッド！」

「礼なんていいぜ！仲間だろ！」

「はい……！」

「そうだぜ！ピンク！」

「俺たちは、いつでも五人一緒だぜ！」

「お前がピンチの時は、誰かが必ず守る！」

その他の戦隊メンバー、ブルー、イエロー、グリーンが桃華を守るような陣形で集まった。

「自分たちは一人一人出来る事をやって、出来ない事は誰かが、それを補う…それが戦隊チームってものさ！」

「みんなあ…！」

桃華は、戦隊のチームワークの素晴らしさに、改めて感動した。

「それじゃあ、一気に行くぞ！！」

「おおー！」

そして、キボンヌジャーの必殺技キボンヌボンバーで、ボス怪人もろとも、ヨドミガルドの拠点一つを壊滅させた。

その日、勝利の祝賀会が行われた。

戦隊メンバー内では、通例となっており——。初陣だった桃華にとっては、初めての祝賀会だった。

戦隊秘密基地の一角にあるラウンジで、それは行われ——。テーブルには、高級ホテルでパーティーが行われてる際に出てきそうな料理が並んでいる。そして、ビールやワインなどのお酒類も当然の如く用意されていた。

「それじゃあ、改めまして……！」

「桃華……！ 輝石戦隊キボンヌジャー入隊おめでとう！……そして、初陣勝利を祝して…」

「カンパーイ！！」

「それじゃあ、桃華！一言、どうぞ！」

「はい！夢だった輝石戦隊キボンヌジャーに入隊して、皆さんに助けられてばかりですけど、これから私が出来る事を精一杯がんばりますので、宜しく願います！」

「おう！任せな！」

それから、祝賀会は桃華を中心に盛り上がり——。酒の飲み方において、自分の限界を知らないでいた桃華は、皆がお姫様のごとく扱われる自分に酔いしれながら、戦隊メンバーにお酒を注がれるままに飲酒を繰り返していた。

そして、宴もたけなわ——。

「あー… 私…ちょっと、酔っ払っちゃったかも……私…そろそろ…部屋に帰って、寝ますう……」

桃華が、そう言って席を立つと——。

「大丈夫？桃華？」

そう言って、キボンヌレッドこと赤井が桃華の肩を抱き寄せて来た。

「ちょっとお～赤井さん、セクハラですよお～」

「いや、桃華…自分では気がついてないようだけど、フラついてたからさあ…だ
いぶ酒飲んでたみたいだし……」

「ええ？私、フラついてましたあ？」

事実、桃華はフラついていなかった。

なぜ赤井がそんな事を言ったのか——。彼には、桃華がフラついたように見え
た。だから、思わず手を差し伸べた…否、それは、そういう事ではなかった。

桃華以外の戦隊メンバー四人で、桃華が席を立ち、部屋へ帰ろうとしたら——。
誰が最初にその行動をするか、それをジャンケンで決めていた事だった。

「初めての戦いで疲れもあるだろうから、俺が部屋まで付き添ってあげるよ」

「すみません。何から何までえ～それじゃあ、お願いしますう～」

お酒の席という事もあり、桃華の口調はいつもよりクダけていた。

「ほら、俺の肩に手を回しな」

そう言って、赤井は桃華の身体を抱き寄せながら、桃華の腰に手を回した。

「ちょっとお～赤井さん、なんか鼻息荒くないですか？」

いつもなら先輩に対して、そんな事を言わない桃華だったが、酒の勢いもあつ

て、思った事を口にする状態だった。

「そ、そんな事ねえよ！ほら、さっさと行くぞ！」

赤井は、他のメンバー三人から逃げるようにして、桃華を連れてラウンジを出ていった。

「くそお～！赤井のやつ、羨ましすぎるぜ」

「まあ、しょうがない」

「はあ～俺も早くやりてえ～」

三人は、桃華の残り香があると思われる――。桃華が座っていたソファを撫でまわしながら、各々の気持ちを口にした。

桃華の部屋は――。緊急時を想定され、戦隊メンバー全員、戦隊基地内に高級マンション並みの一室が用意されており、男性陣は同じフロアだったが、女性である桃華の部屋は別フロアにあった。

桃華の部屋に行くため、基地内のエレベーターに桃華の身体に密着しながら乗っていた赤井は――。

「もうちょっとで着くからな…」

……などと桃華に言いながらも、興奮を抑えられないでいる自分を言い聞かせていた。

それから、桃華の部屋の扉前に辿り着いた赤井は、眠そうな桃華に声を掛けた。

「桃華、ブレスレット」

「はい？」

戦隊メンバー全員が着けているブレスレットは、戦闘スーツに変身する用途の他に、基地内の各ルームにおけるセキュリティキーになっていた。それに気づいた桃華は、自分の部屋に入るため、扉の認証パネルにブレスレットをかざした。

すると、扉は自動ドアの開閉式で、左右に開いた。

「おっと！桃華…フラフラじゃないか…怪我でもしたら、大変だからベッドまで運んでやるよ」

「え？そんな…！」

赤井は扉が開くや否や、桃華がフラついていたかのような台詞を言って、桃華がそれを拒む前に――。桃華の身体をお姫様抱っこで持ち上げた。

「すみません…こんな事までしてもらって…」

桃華は、早くベッドに横になりたいという思いもあり、赤井の行為を素直に感謝していた。

「大丈夫！大丈夫！」

赤井は玄関に入ってから、漂っていた女性特有の甘い匂いに誘われながら、すぐに桃華の寝室へ向かった。部屋の間取りについては、戦隊メンバー各部屋、同じという事あり――。桃華の寝室の場所へは迷う事なく、赤井は直行したのだった。

桃華の寝室に入ると――。そこは、キボンヌピンクのイメージカラーとまでい

かないが、淡いピンク色で統一された可愛らしい部屋で、整理整頓が行き届いていた。

それを舐め回すように観てから赤井は、桃華をベッドに座らせると、桃華が着用していた戦隊支給のジャケットに手を掛けながら――。

「上着脱いだ方が、楽だろ？」

「すみません…」

大義名分を得た赤井が、桃華の上着を脱がせると、ジャケットの上からでも分かっていた桃華の豊満な膨らみが……ノースリーブシャツに包まれた状態で現れた。そして、桃華の手首に着けてあるブレスレットを外してやると――。

「ブレスレット…ベッドの脇に置いとくぞ」

そう言いながら、桃華に気づかれないようにして、それを自分のポケットにしまった。それは、これから行う予定の事に対して変身されては困るからだ。

「ありがとうございます…」

そんな事とはツユ知らない桃華は、ブレスレットを優しく外してくれた事に眠そうな顔で頭を下げた。

すると次に、赤井は――。桃華のノースリーブシャツの背中に浮き上がっていたブラ線に手を回して、その上からブラのホックを外してやった。

「ちょっ！赤井さん…何してるんですかぁ？」

【体験版】 おわり